

今年の学校給食会調理員講習会は、七月末から始まったが、その前週に北海道は釧路へ、小生の弟分で寿司割烹を経営している佐々木氏の一人息子、慎太郎君が結婚することに成り家内共々来釧したのだが、東京の暑さに比べ十度C以上の温度差で避暑が出来て、久方振りに休暇を頂いた様な日を過ごすことが出来た。ところが、帰京してすぐ此の度の講習会に来たのであるが、暑さには覚悟してはいたものの思ったより暑さはひかえ目で我々を迎えてくれ、気温のギャップに悩まされることなく講習会に臨めたのは幸いであった。

今年の助手は、去年と同じく佐藤君を連れてきたが、栄養士の助手は彼が惚れて惚れて結婚した沙代さんを今度は小生が口説いて、手伝ってもらうことに成った。そこはやはり夫婦である……何事にも阿吽の呼吸で、仕込みも本番も思ったより以上にスムーズに運び、アンケートにも教え方の対応が素晴らしかったとおほめの言葉が沢山有り、人選に狂いはなかったと感謝した次第である。

山口での講習会を無事終えて帰京したとたん今度は、北京オリンピックでマスコミが大騒ぎである。世界人口のトップを占める中国に対しては、歴史上文化、宗教等幾多の交流を通じて同じアジア民族としての親しみがあるはずなのに、調理師学校の留学生を教えていた当時から現代の中国の若い世代に対する何故か不思議な違和感は何であろう。先人達が学んだ学問等の本質的な民族は今何処に有り？と思ってしまうのは小生だけではないであろう。

オリンピックの開会式から商業ベースがありありと国策として描き出され、低賃金労働者に支えられ、災害復興やチベット紛争などの深い課題を、まず解決して真の自由主義国家の建設を目指すべきあの国が、軍備増強とオリンピックの金メダル数に巨費を投じていることに国民は何も感じないのだろうか？ 競技の成績が心配であるだけではなく、食と環境に対して人間として不信感を持った各国のアスリート達は、あるいは出場を取り止め、事前の合宿を安全な日本各地で行っていた選手団が多数有ったのは、五輪に於ける派生的現実を表しているのは大変興味深いことである。北京五輪が開幕したその日には、ロシア軍がグルジアの南オセア自治州に軍事侵攻し市民を含めて多数の死傷者が出ました。古代五輪では停戦をして競技に打ち込んだ歴史があり、オリンピックの平和精神に反するみにくいことである。この平和な日本に住んでいると、全く理解出来ずに平和ボケしてしまうのではと不安になる。

平和ボケをしない様にこの九月三日から、マレーシアのクアラルンプールに出張することにした。今年初めからクアラルンプールで一千億円の年商をしている、ネットワークビジネス企業のオーナーが、すでに本社ビルと香港で寿司割烹を経営しているが、今年七月初めに高級寿司割烹をDガーデン Hap seng に150坪の店舗としてテスト開店し、小生の弟子を夫婦で差向け現在立上げ中である。そのグランドオープンの為に二週間程行くのである。やはり外国では言葉の問題もあるが「大和男子」の精神がなければならず、一刻も休む暇などないのが、又自己を強くする支えになる。

閑話休題……一番大切なものは一番身近にあることに最近思い至った。

他人が持っているものが欲しくなる。これが人情である。一年の内、十日も行けないのに軽井沢に別荘を持って「下界は暑いでしょう」と電話をかけまくって得意になっている。下界にこそ、真実の仏法があることを知らないのだ。「明珠」とは仏性のことだ。仏性とは、自分の心そのものなのだ。軽井沢が涼しくて天国ならば、そこにだけ「明珠」があるわけではない。東京が暑くて下界だから「明珠」がないというわけではない。自分が心であり心が「明珠」である。

明珠は自分の たなごころ 掌にあるのだ。「明珠在掌」なのだ。

人間として一番大切なものは、一番身近なところにあり、いつも一緒にいることを知れば、人生の開眼はなされたといつてよいのではないだろうか。

合 掌

